

自分の悪さと向き合って

karinomaki

## ア・プリアリな総合判断

---

絶対に間違った生き方を一度もしない人はこの世にいません。取り返しのつかないことをしてしまうこともあります。

それと戦っているのが、カントのア・プリアリな総合判断ととらえてみましょう。

ア・プリアリな総合判断とは、私なりに書けば、神の真理に人間がとどくことです。

これが可能かどうか、カントは書いているのですが、そのために苦闘しているのが純粋理性批判とっていいでしょう。

## 人生の過ち

---

人間は間違いを繰り返す生き物です。時に、差別をします。これこそが、ア・プリオリな総合判断を倒壊させるものです。差別は、取り返しがつかない罪なのです。

宗教は、差別を生みます。自分たちだけが正しいと思わせます。上辺が美しくはなりますが、底はドロドロになります。

カントの時代、ヨーロッパはキリスト教中心の世界でした。カントはまさに、差別や偏見と戦っていたと思うのです。

## 心の奥底の泥を捨てる

---

カントは、規則正しい生活をしました。あえてそうしないと、美しい書は書けないと思っていたのでしょう。私達は、カントのように生きられないと思うのですが、常に心の泥、毒を浄化することはできます。

私は、一つの指輪を8年間、カバンの中にしのばせていました。最近、その指輪を捨てました。心の毒と共に・・・。

ここで、カントのア・プリオリな総合判断は、心の毒をいかに捨てて行けるかということを書いているということ、分析したいと思います。

## 倒壊しない家

---

カントはア・プリオリな認識の説明に、次のような例えを用いています。

人は、誰かが自分の家の土台を掘りくつがえしたとすれば、その人について、彼は自分ぼ家が倒れることをア・プリオリに知ることができたと、言い換えれば、自分の家が実際倒れたという経験を待つ必要がなかったと言う。

これは、経験なしの認識であり、ア・プリオリな認識と言われます。

総合判断とは、もっと、神に近い認識であると、私は思います。

人の経験をはるかに飛び越えているのです。神の摂理と言っていいと思います。

純粋理性批判は、倫理学の本ではありませんが、私はこの本の中から倫理を読み取ってみたいと思います。

## 捨てた指輪

---

私は自分のことを悪い人間だと思っています。8年間大事にした指輪も、悪い心と共に捨てました。

その指輪は私にとって生きる軸でした。

カントの先ほどの例えの、倒壊する家の土台と同じです。

しかし、私の心は倒壊しなかった。

私は思うのです。カントは純粋理性批判で決して倒壊しない理論を必死に打ち立てたと。

## 悪さを持って純粹理性批判に挑む

---

しかし、私にはカントのような美しい生き方は決してできません。それなら、自分の悪い土台を掘りくつがえしても、倒壊しない家を建てたい。そう考えると、私の中のカント哲学は、ゆがんだ私から見て、逆に傾いて見えてくるのです。

人は生来悪であると、カントも別の著書で書いています。しかし、カントはあまり人と心から接しないで、一人の時間を大事にして生きた。

カントはある意味で、人の悪から目をそらして生きていたような気がするのです。

私が悪さを持ち、それと戦い、自分の悪い土台を捨て続けながら、反省し続けながらカントの哲学を勉強したいのは、カントの研究者にはなれないと思い知ったときでした。

## 倒壊しかけ

---

私はカントと違って弱い人間です。悪い人間です。許せない人は言葉で攻撃するし、人を傷つけたことがいっぱいあります。

しかし、それは毒を見て、ふたをできなかったからでした。目をそらすことなく、私は自分と人の悪を見続けたいです。

私の精神は、たくさんの悪と、自分の悪で倒壊しかけますが、カントの美しさを思います。そして、心から正しいと思う、一人の人をこの世で見つけてしまいました。その人と出会うのに、40年かかりました。

私には支えがたくさんあります。だから、周りに誰もいなくて、指輪を大事にし続ける人生は幕を下ろし、新しい人生が広がっています。